

プーシキン『西スラヴ人の歌』における セルビア民謡の翻訳2篇について(2)

伊 東 一 郎

(承前)

7b 『西スラヴ人の歌』第14篇「妹と兄弟」のテキスト(1)

以上のカラジッチの民謡集から取られたセルビア語テキストを訳したのがプーシキンの『西スラヴ人の歌』第14篇「妹と兄弟」である。その自注には「この素晴らしい物語詩は私がヴーク・ステファノヴィッチ[・カラジッチ]の『セルビア民謡集』からとったものである」とある。邦訳は「兄いもと」の題で外村史郎によるものが戦前にあるのみである[プーシキン 1937]。

この翻訳にプーシキンが用いた韻律は独特のもので、セルビア叙事詩の10音節詩行を機械的に踏襲したものではない。音節数も原詩の10音節を厳密に守ってはいず、1詩行の音節数は9から11の間を動いている。行末は必ず強弱という女性終止をとるが、その韻律は2拍子のホレイ、ヤンプ、3拍子のアナーベスト、アムフィブラーヒイ、ダークティリのいずれの枠にも収まらず、一行に3つある強音節間の弱音節の数も一定しない。この韻律をプーシキンは、最初『西スラヴ人の歌』に含めるつもりでいた民謡詩「金の魚と漁師の話」にも用いている。この韻律は元来セルビア叙事詩をロシア語訳するための形式としてスラヴ学者ヴォストーコフが用いたものだが、この韻律の韻律論的解釈、ヴォストーコフがこの韻律を採用した意図についてはまだ解決をみていない(この問題については稿を改める予定でいる)。

そもそもセルビア語のアクセントはロシア語のそれとは異なり、母音の長短、抑揚の上昇・下降の区別によって4種類あり、ロシア詩法のように強弱アクセントの規則的交代という単純な方法では詩行が構成されていない。このことに関連してヤコブソンはプーシキンの以下の訳詞の34-37行とセルビア民謡の36-40行を対比し次のように述べている[Jakobson 1957:34]。

「セルビア民謡の詩行においては力点間の音節数がより自由に変化する、という事実がロシアの聞き手にとっては、詩行を同一音節数で一貫させるという原則そのものの否定として再解釈され、[第4音節と第5音節の間の]強制的な休止も省かれてしまった。まさにセルビア叙事詩の4+6という詩行をプーシキンはそのように訳した—

プーシキン	カラジッチ [すべて 4 + 6 音節]
34 В ту по́ру бра́т сестре́ повéрил. [9音節]	36 То́ је бра́тац се́ји вје́ровало,
Бо́т Па́влиха пошла́ в са́д зе́лёный, [10音節]	Кад то́ ви́ђе мла́да Па́вловица,
Сы́вого со́кола та́м зако́бла [11音節]	О́на о́де но́ћу у гра́дину
И сказа́ла своему́ госпо́дину... [11音節]	Те за́клала сы́вога со́кола,
	Па го́вори сы́вме госпо́дару...]

さて『西スラヴ人の歌』第14篇のプーシキンのテキストは次の通りである。

Сестра и братья

「妹と兄弟」

1 Два дубочка вырастали рядом, Между ими тонковерхая ёлка. Не два дуба рядом вырастали, Жили вместе два брата родные: Один Павел, а другой Радула, А меж ими сестра Елица. Сестру братья любили всем сердцем, Всякую ей оказывал милость; Напоследок ей нож подарили	二本の樫の木が並んで伸びていた その間に梢の細いエゾマツの木が伸びていた。 それは二本の樫の木が並んで伸びていたのではない 一緒に二人の血を分けた兄弟が暮らしていたのだ— 一人はパーヴェル、もう一人はラドウーラ、 その間に妹のエリーツァがいた。 妹を兄弟は心から愛していた 何くれとなく優しく目をかけた あまつさえ彼女に小刀を贈った、 銀の象嵌のある金メッキの小刀を。
10 Золоченый в серебрянной оправе. Огорчилась молодая Павлиха На золовку, стало ей завидно; Говорит она Радуловой любе: «Невестушка, по богу сестрица! Не знаешь ли ты зелия такого, Чтоб сестра омерзела братьям?» Отвечает радулова любя: «По богу сестра моя, невестка, Я не знаю зелия; такого	パーヴェルの若い妻は悲しんだ、 小姑が妬ましくなった パーヴェルの妻はラドウーラの愛する妹に言った 「お嫁さん、神様のご縁での妹さん！ あなたは薬草を知らないか 妹をその兄弟が嫌いになるような？」 ラドウーラの愛する妹が答えて言った 「神のご縁での姉さん、お嫁さん 私はそんな薬草は知りません 知っていたとしても貴方には教えないでしょう 私を兄さんたちは愛してくれて 私に何くれと優しくしてくれました」
20 Хоть бы знала, тебе б не сказала; И меня братья мои любили, И мне всякую оказывали милость».	

- Вот пошла Павлиха к водопою
 Да зарезала коня вороного
 И сказала своему господину:
 «Сам себе назло сестру ты любишь,
 На беду даришь ей подарки:
 Извела она коня вороного».
- 30 Стал Елицу допытывать Павел:
 «За что это? скажи, бога ради».
 Сестра брату с плачем отвечает:
 «Не я, братец, клянусь тебе жизнью, [兄さん私ではありません、あなたに命にかけて誓います
 Клянусь жизнью твоей и моею!]
 В ту пору брат сестре поверил.
 Вот Павлиха пошла в сад зелёный,
 Сивого сокола там заколола
 И сказала своему господину:
 «Сам себе назло сестру ты любишь,
 На беду даришь ты ей подарки:
 40 Ведь она сокола заколола».
 Стал Елицу допытывать Павел:
 «За что это? скажи, бога ради».
 Сестра брату с плачем отвечает:
 «Не я, братец, клянусь тебе жизнью, [兄さん命かけて貴方に誓います、私じゃありません
 Клянусь жизнью твоей и моею!]
 И в ту пору брат сестре поверил.
 Вот Павлиха по вечеру поздно
 Нож украла у своей золовки
 И ребенка своего заколола
- 50 В колыбельке его золоченной.
 Рано утром к мужу прибежала,
 Громко воя и лицо терзая.
 «Сам себе назло сестру ты любишь,
 На беду даришь ты ей подарки:
 Заколола у нас она ребенка.
- そこでパーヴェルの妻は水飼い場に出かけた
 そして黒馬を切り殺した
 そして自分の夫に言った—
 「貴方は妹を可愛がったが裏切られた
 彼女に贈り物をして災いを招いた
 彼女は [贈られた小刀で] 黒馬を切り殺したのですから」
 そこでパーヴェルはエリーツァに問い質した
 「何故こんなことを、お願いだから言ってくれ」
 妹は兄に泣きながら答える—
 「兄さん私ではありません、あなたに命にかけて誓います
 貴方と私の命にかけて誓います！」
 その時兄は妹を信じたのだった。
 そこでパーヴェルの妻は緑の庭に出かけた
 灰青色の鷹をそこで切り殺した
 そして自分の夫に言った—
 「あなたは愛した妹に裏切られた
 あなたは妹に贈り物を与えて不幸を招いた
 だって彼女は鷹を切り殺したんですもの」
 パーヴェルはエリーツァを問い質した
 「何故こんなことを、お願いだから言ってくれ」
 妹は兄に泣きながら答えた—
 「兄さん命かけて貴方に誓います、私じゃありません
 貴方と私の命にかけて誓います」
 その時も兄は妹を信じた。
 そこでパーヴェルの妻は晩方おそく
 小姑のところから小刀を奪った
 そしてその金の揺り籠の中で
 自分の赤子を切り殺した。
 朝早く彼女は夫のもとに駆けつけた
 大声で叫び顔をかきむしりながら
 「あなたは愛した妹に裏切られた
 彼女に贈り物を贈ったのは災いだった
 彼女は私たちの子供を切り殺したんですから

- А когда еще ты мне не веришь,
Осмотри ты нож ее злаченый».
- Вскочил Павел, как услышал это,
Побежал к Елице во светлицу:
- 60 На перине Елица почивала,
В головах нож висел злаченый.
Из ножен вынул его Павел,—
Нож злаченый весь был окровавлен.
Дернул он сестру за белу руку:
«Ой, сестра, убей тебя боже!
Извела ты коня вороного
И в саду сокола заколола,
Да за что ты зарезала ребенка?»
Сестра брату с плачем отвечает:
- 70 «Не я, братец, клянусь тебе жизнью,
Клянусь жизнью твоей и моею!
Коли ж ты не веришь моей клятве,
Выведи меня в чистое поле,
Привяжи к хвостам коней борзых,
Пусть он мое белое тело
Разорвут на четыре части».
- В ту пору брат сестре не поверил;
Вывел он ее в чистое поле,
Привязал ко хвостам коней борзых
- 80 И погнал их по чистому полю.
Где попала капля ее крови,
Выросли там алые цветочки;
Где осталось ее белое тело,
Церковь там над ней соорудилась.
Прошло малое время,
Захворала молодая Павлиха.
Девять лет Павлиха все хворает,—
Выросла трава сквозь ее кости,
- まだ私が信じられないというのなら
彼女の金の小刀を見て御覧なさい」
これを聞くとパーヴェルは飛び起き
エリーツァの寝室に向かった
羽ぶとんにエリーツァは寝ていた
枕元には金の小刀が下がっていた
鞘からパーヴェルが小刀を抜いてみると—
金の小刀はすっかり血まみれだった
パーヴェルは妹の白い手をつかんだ
「おお妹よ、天罰で命を落とすがいい
おまえは黒馬を殺し
庭で鷹を切り殺した
だがなぜ赤子を切り殺した？」
妹は涙ながらに答えた
- 「兄さんあなたに命かけて誓います、私じゃありません
あなたと私の命にかけて誓います！
もし私の誓いが信じられないならば
私を開けた野原に引き出して
足速い馬たちの尾にしぼりつけ
私の白い体を
四つに引き裂かせなさい」
こんどは兄は妹を信じなかった
兄は妹を開けた野原に連れ出し
脚速い馬たちの尾に結びつけ
馬たちを開けた野原に放った。
彼女の血が滴り落ちた場所に
赤い小さな花が咲いた
彼女の白い体が残された場所には
彼女を弔って教会が建てられた。
しばらく時が経った
若いパーヴェルの妻は病みついた
9年もの間病み続けた
その骨の間に草が生えた

- В той траве лютый змей гнездится,
90 Пьет ей очи, сам уходит к ночи.
Люто страждет молода Павлиха;
Говорит она своему господину:
«Слышишь ли, господин ты мой, Павел,
Сведи меня к золовкиной церкви,
У той церкви авось исцелюся».
Он повел ее к сестриной церкви,
И как были они уже близко,
Вдруг из церкви услышали голос:
«Не входи, молодая Павлиха,
100 Здесь не будет тебе исцеленья».
Как услышала то молодая Павлиха,
Она молвила своему господину:
«Господин ты мой! прошу тебя богом,
Не веди меня к белому дому,
А вяжи меня к хвостам твоих коней
И пусти их по чистому полю».
Своей любви послушался Павел.
Привязал ее к хвостам своих коней
И погнал их по чистому полю.
- 110 Где попала капля ее крови,
Выросло там тернье да крапива;
Где осталось ее белое тело,
На том месте озеро провалило.
Ворон конь по озеру выплывает,
За конем золоченая люлька,
На той люльке сидит сокол-птица,
Лежит в люльке маленький мальчик;
Рука матери у него под горлом,
119 В той руке теткин нож золоченый.
- その草の中に獐猛な蛇が巣を作った
蛇は彼女の瞳を貪り夜になると去って行く。
若いパーヴェルの妻はひどく苦しむのだった
彼女は自分の主人に言った
「ねえ私のご主人様、パーヴェル
私を義理の妹の教会に連れて行って下さい
その教会のそばで私は癒されるかもしれません」
彼は彼女を妹の教会へと連れて行った
2人が教会のすぐ近くまで来た時
2人は突然教会の中から声を聞いた
「若きパーヴェルの妻よ、入ってはならぬ
ここではおまえが癒されることはない」
これを聞くと若きパーヴェルの妻は
自分の主人に言った
「わがご主人!あなたに神かけての御願いです
私を白い家には連れて行かず
私をあなたの馬たちの尾に縛り付けて下さい
そして馬たちを開けた野原に放して下さい」
自分の妻の頼みをパーヴェルは聞いた
彼女を自分の馬たちの尾に縛りつけ
馬たちを開けた野原に追い立てた。
彼女の血の滴が落ちたところに
いばらとイラクサが生え
彼女の白い体が残された場所には
地が陥没し湖ができた。
その湖には黒馬が、
馬の後から金の揺り籠が浮かび出て
その揺り籠には鷹がとまっていた
揺り籠には小さな男の子が横たわり
その喉もとには母親の手がかけられ
その手には叔母の金の小刀があった。

以上の翻訳においてはセルビア語原文において頻出する頭韻の手法の多くが、プーシキンのど

ちらかといえは直訳的な翻訳においてそのまま保たれていることをトルベツコイは指摘し、次のような例を抜き出している [Трубецкой 1987:366]。(数字は行数)

プーシキン	カラジッチ
9 <i>Напоследок ей нож подарили</i>	10 <i>Најпоследње ноже оковане</i>
12 <i>На золовку, стало ей завидно</i>	13 <i>Завидила својој заовици</i>
81 <i>Где попала капля ее крови</i>	87 <i>Ђе је од ње капља крви пала</i>
107 <i>Своей любви послушался Павел</i>	115 <i>То је Павле љубу послушао</i>

訳注 (数字は行数)

- 1 スラヴ・フォークロアにおいては植物を人間の比喩として用いることが多い。その場合植物の総称の文法的性別が喩えられる人間の性別に一致させられるのが普通である。ここでは男性名詞の дуб 樅が男性に、女性名詞エゾマツ ель が女性に喩えられている。セルビア語原文でロシア語の дуб に対応するのは бор「松」だが、ロシア語の同語形 бор は「針葉樹林」をさし、単独の「松」を意味する単語は女性名詞 сосна である。このためセルビア語の бор を сосна で訳すと、この兄と妹のシンボリズムが成立しない。このためプーシキンは男性を象徴する木としてロシア民謡にしばしば登場する дуб を訳語に用いたと思われる。[伊東 2001] 参照。
- 2 スラヴ・フォークロアの修辭法に特徴的な「否定比喩」。「~が~なのではなく、~が~なのだ」という表現をとる。
- 3 милость はセルビア語の милост を同語形で訳したもの。しかしロシア語の милость は「同情、慈悲」の意味だが、ここのセルビア語 милост は「贈り物」の意味である。
- 11 Павлиха < Павел. 接尾辞 -иха は男性名詞から女性名詞を派生し、意味は「女性の~、~の妻」を表す。ここでは「パーヴェルの妻」の意味。
- 12 золовка: ロシア語の姻族名称。「夫の姉妹」を意味する。「義理の姉妹」。
- 14 невестушка : невеста の愛称形。
- 23 Вот пошла Павлиха к водопою 「パーヴェルの妻は水飼い場にでかけた」:セルビア語原文第25行の Она оде коьма на ливаду 「彼女は牧場の馬たちのところにでかけた」に対応する。トルベツコイはプーシキンがセルビア語の単語 ливада 「牧場」の意味を知らず、音韻的に近く「馬に水をやる場所」として意味的にも辻褄の合う водопой 「水飼い場」で訳

したのだろう、としている [Трубецкой 1987:369]。

- 35 Сивого сокола там заколола:セルビア語原文第39行 Те заклала сивого сокола のほぼ直訳。
形容詞 сивый はロシアとセルビア・フォークロアに共通の「鷹」сокол の枕詞。
- 57 Осмотри нож ее злаченый 「彼女の金の短刀を見て御覧なさい」:対応するセルビア語原文は第61行 Извади joj ноже од појаса「彼女の腰から短刀を引き抜いてごらんなさい」。プーシキンはセルビア女性独特の腰に短刀を差す、という習慣の描写を故意に省いたと思われる。
- 64 белу руку : = белую руку 「白い手」。形容詞「白い」はロシア・フォークロアでは「手」の枕詞
- 75 белое тело : 「白い体」同上。
- 78 чистое поле : 「開けた野原」чистое はロシア・フォークロアで поле の枕詞。「広く開けた」の意味で「清らかな」の意味ではない。セルビア語原文では широко поле。
- 89 змей : 「蛇」。セルビア語原文では複数形 змије。
- 90 Пьет ей очи, сам уходит к ночи : ここに対応するセルビア語原詩第96行は半詩行で脚韻を踏むいわゆるレオン韻を用いており (Очи пију, у траву се крију)、プーシキンもこれを再現している。
- 116 сокол-птица : 「鳥の鷹」。種名と属名と合成語的に並列するのはロシア・フォークロアの文体論的特徴。類義語反復の一つの様式と考えられる。[伊東 1977]
- 119 теткин : тетка の物主形容詞。тетка はふつう「叔母」の意味だが、ここでは明らかに夫の妹の意。

8. 結論

これら2篇のセルビア民謡の翻訳はプーシキンがセルビア民謡を形式と内容の双方でロシア民謡の様式に移そうとした試みを示している。文体的にはセルビア民謡独特の語法をロシア民謡独特の語法に移しつつ、部分的にはセルビア民謡の語法を直訳的に残している。このためにプーシキンはスラヴ民謡詩共通の語法 [Миклошич 1895] を用いてある意味で汎スラヴ的な文体を創出している。形式的には「妹と兄弟」において、いわゆるセルビア叙事詩の10音節詩型デセテラツ deseterac を独特の韻律で翻訳し、他の『西スラヴ人の歌』の叙事的詩篇にもそれを採用することで、連作詩全体の統一を取っている。このプーシキンによるセルビア民謡の翻訳はスラヴ・フォークロア間の相互の認識の在りかたを内容と形式の双方で示す興味深い事例を提供していると言えよう。

注

(1) 本稿は前稿「プーシキン『西スラヴ人の歌』におけるセルビア民謡の翻訳2編について(1)」の完結編である。前稿は「妹と兄弟」のセルビア語テキストの訳注つき対訳で終わっている。

文献

(この文献表は前稿「プーシキン『西スラヴ人の歌』におけるセルビア民謡の翻訳2篇について(1)」に関わるものをも含めた全体的なものである)

Афанасьев, А.

1985 *Народные русские сказки*. II. Москва.

Ајдачић, Д.

2004 О неким мистификацијама народних песама балканских Словена у 19 веку. // *Прилози проучавању фолклора балканских Словена*. Београд.

Беркопец, О.

Пушкинские переводы сербско-хорватских песен. // *Slavia* XIV-3

Бобров, С.

1964 К вопросу о подлинном стихотворном размере пушкинских « Песен западных славян » // *Русская литература* 1963 № 3

江川卓

1991 『なぞ解き『カラマーゾフの兄弟』新潮社(新潮選書)

Гаспаров, М.

1975 Русский народный стих в литературных имитациях. // *International Journal of Slavic Linguistics and Poetics*. 19

1984 *История русского стиха*. Москва.

Фомичев, С.

1983 «Песни западных славян» Пушкина (История создания, проблематика и композиция цикла) // *Духовная культура славянских народов. Литература, фольклор, история. Сборник статей к IX Международному съезду славистов*. Ленинград.

Иванов, Вяч.

1967 Заметки по индоевропейской поэтике. // *To Honor Roman Jakobson*. II. The Hague - Paris: Mouton.

伊東一郎

1977 「ロシア・フォークロアにおける類義語反復について」『ロシア語ロシア文学研究』9

1983 『チャイコフスキイ歌曲歌詞対訳全集 第2巻』新期社

1995 「『原初年代記』の民俗語彙(2)——グースリ」『なろうど』30号

2001 「小さいぐみの木」//伊東一郎『マーシャは川を渡れない』東洋書店

Jakobson, R.

1957 The Kernel of Comparative Slavic Literature. // *Harvard Slavic Studies*. 1.

1966 Zur vergleichende Forchung über der slavischen Zehnsilber. // R. Jakobson. *Selected Writings*, IV. The Hague-Paris: Mouton.

Караџић, В.

1976 *Српске народне пјесме*. I-VI. Београд.

Колмогоров, А.

1966 О метре пушкинских « Песен западных славян » // *Русская литература* № 1

- Kuhać, A.
1878 *Južno-slovenske narodne popevke*. Zagreb.
- Курихара
1986 К проблематике «Песен западных славян» А.С. Пушкина. // *IV Советско-японский симпозиум по литературоведению*. Москва.
- 栗原成郎
1987 「ルサルカの周辺」// 法橋和彦編『プーシキン再読』創元社
1988 「ヴェーク・カラジッチー人と業績—生誕二百年を覚えて—」『窓』65号
1995 『吸血鬼伝説』河出文庫 河出書房新社
- メリメ, P.
1977 「グズラ」杉捷夫訳 // 『メリメ全集』1巻 河出書房新社
- Mérimée, Pr./Пушкин, А.
1987 *Мериме — Пушкин. Сборник*. (На французском и русском языках). Составитель Зоя И. Кирнозе. Москва.
- Миклошич, Ф.
1895 *Изобразительные средства славянского эпоса. // Труды славянской комиссии Московского Археологического Общества*. I.
- プーシキン, А.
1926 「ウルダラーク」米川正夫訳 // (「露西亜童謡集」米川正夫訳) 『世界童話大系』18 世界童話大系刊行会
1937 「西部スラヴの歌：抄」外村史郎訳 (「鶯」「鬼」「兄いもと」「ヤヌシ王子」「馬」) // 『プウシキン全集』5 改造社
1990 『プーシキン詩集 本邦初訳』草鹿外吉 青磁社
1968 『プーシキン 抒情詩』(世界名詩集23) 稲田定雄訳 平凡社
1972-74 『プーシキン全集』(全6巻) 河出書房新社
- 佐藤繁好 (編)
1999 『日本のプーシキン書誌 (翻訳・紹介・研究目録)』自費出版
- Смирнов, Ю.(сост.)
1987 *Сербские народные песни и сказки из собрания Вука Стефановича Караджича*. Москва.
- Šrepić, M.
1899 *Puškin i hrvatska književnost // Ljetopis Jugoslavenske Akademije znanosti i umjetnosti za godinu 1898*.
- 種村季弘
1985 「文学的変装術」// 種村季弘『アナクロニズム』河出書房新社 (河出文庫)
- Томашевский, Б.
1929a О стихе «Песен западных славян». // Томашевский, Б. *О стихе*. Ленинград.
1929b Генезис «Песен западных славян». // Томашевский, Б. *О стихе*. Ленинград.
- Трубецкой, Н.
1987(1937) К вопросу о стихе «Песен западных славян» Пушкина. // Трубецкой, Н., *Избранные труды по филологии*. Москва.

